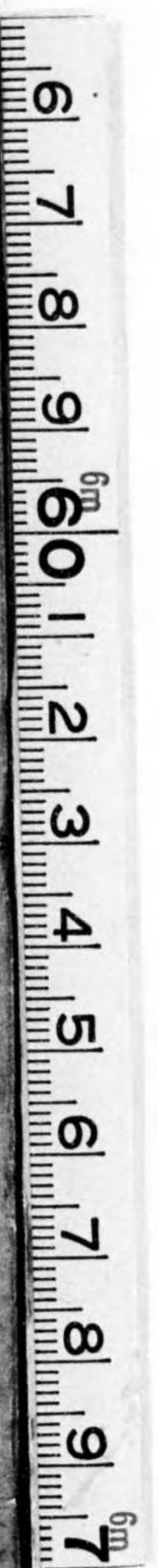


鈴木小舟白歌集

特 258

952



始



特258
952

54

卷之二



聖
氣
筆
寫



玉
帳

沂秋亦長為守題



新編 源氏物語



清秋小夜為守題

序

小舟刀自なくあらわしむはつこの世の今

はる親にかまひとほつらむる糸

彼の夢や山ごらむせむ乃秋の輝

菫那きりー建てるもとくはなが筆

徴せし終るこころはあはれむる

きこゆるるごころ刀守が世はあはれむる

らむるはるの世はあはれむる



舞會翁の女弟子より感得するところ
うち一人あるその會友田中麗子夫人と
を殊に母とす。一るは乃集申の
初とともからむ。又伊藤あや
とらへて婦人から社一カ守の
妙より後又その妙に於て
そなたの心から集の心
會友の心から集の心

一窺する。振る舞うは
多し。心から集の心
の句を見よ。或は
さういふ。女の心
は。極め。女。心
人。心。心。心。心
あはれ。心。心。心。心
願。心。心。心。心

難き鳳凰の間の廊下破格をもて祇候
きりかへし時乃礼祝まがらふ我今も目に
留りし事—— 忘れづらんや老

昭和五年三月

御初世主人 政子



Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho) on a dark, textured background. The text is arranged in several vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of the cursive style.

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho) on a light background. The text is arranged in several vertical columns, reading from right to left. The characters are fluid and expressive, typical of the cursive style.

新年梅
ちきよめをうけつるはなを
うめはなをうけつるはなを

あまはれ
たまの梢ははゆめ
うきにあらゆる

せみのうらみ
あま

鈴木小舟刀自歌集

新年

新年 水

大前にさゝくる梅のはなかめにまつさしそへむとしの若みつ

新年 梅

大君の御歌はしめにうたはれて梅もうれしきとしや知るらむ

明治三十五年歌御會始預選御前披露を物陰にて陪聽を許さる

新年 鶏

あかつきの鶏の八聲や新年のほきうたうたふはしめなるらむ

新年 旅

門松にやとはまかせてあらたまの年のはつ旅おもひ立ちてむ

大正二年元旦に

新玉のとしはたてともとしほきのひとも來らす文もきたらす

大正四年元旦 御眞影のみまへにぬかつきて

新年のよことはきこえあくれとも玉の御聲は聞くよしもなし

新年に 大正五年

ことしより重荷おろしてかろくとたとるかうれし敷島の道

元日に雨のふりければ

うるほひのしけかる御代をおもふかな年の始に雨こもりして

をりにふれて

降る雪に年ほき人もこすなりぬ子らをつとへて歌かるたせむ

菰野山にて新年を迎へて

門松にむすふつら、のしらゆふは都に知らぬかさりなりけり

春歌

立春朝に

堪へかたき寒をしのきしのき來て春を迎へし今朝のうれしさ

立春梅

わかやとの早咲の梅さかりなり今日來む春に見せてほこらむ

初春風

はるかせの袖ふくなへに梅のはな訪ふ心にもなりにけるかな

山家早春

日あたりの畑の菜のはな咲きそめて春は來にけり山もとの里

をりにふれて

うくひすとあひ住ひせし故郷のこひしき春になりけるかな

薄霞

はるといふしるしはかりの薄霞なか／＼人の目にそたちける

山晩霞

うくひすの今まで鳴きし山もとは霞こめてそ暮れわたり行く

江上霞

魚の飛ふおとそきこゆる夕しほの入江のかすみ雨ふくむらむ

都餘寒

うちひさすみやこ大路の霜柱たちかへりてもさむきころかな

春埋火

暖になりぬと口にいひなからなほもよりそふうつみ火のもと

家の會の當座に春暖を

かさねきの衣の垢のめたつまてのとかになれる昨日今日かな

をりにふれて

埋火の消えはてたるも知らぬ返春はのとかになりけるかな

鶯

大木曾山檜原かおくはうくひすの聲よりほかに春なかりけり

ある朝

雪ふかき庭にきこゆるうくひすの初音は夢のこゝちこそすれ

曉鶯

ほの／＼としらみ初めたるみそのふの梅のはやしに鶯の鳴く

雨中鶯

つれ／＼と雨の降る日をたゝひとり聞きくらしけり鶯のこゑ

深山鶯

籠飼する人にきかせまほしきかなみやまの奥のうくひすの聲

岡 鶯

つゝし咲く岡越えゆけはおくるこゑむかふるこゑも鶯にして

禁 庭 鶯

宮人かあかもすそ引き若菜つむ御苑かすみてうくひすの鳴く

田 家 鶯

きく人もなき畑中の梅か枝にこゑもをしますうくひすのなく

一月二十七日朝またきに鶯のなくを聞きて

うくひすの初音聞きつる朝床にまつしのはるゝふるさとの春

はしめて山階宮の姫みこに鶯といふ御けいこ題を奉り心の中に

鶯のひと日ひと日にふしなれむこゑ待つ春そたのしかりける

柳

たをやかに見えてもをれぬ青柳をやまと女のこゝろともかな

柳 風

吹くかせになひくを見れば門柳いつしか春の色に出てにけり

月 前 柳

うくひすのなかなすなりぬる青柳のこすゑを見れば月そ匂へる

堤 柳

いろよくも染め出てけりなこかひする里のつゝみの青柳の糸

門 柳

はしためかあくるもまた鶯ははやおとつれぬ門のやなきに

雨 中 春 草

春雨のつゆの光に見出てけりかれふかなかにもゆるわかくさ

塘 春 草

孫つれてあそぶおうなも見ゆるかな若草もゆる里のつゝみに

摘草

山の手はみやこなからものとかなり垣根つたひに摘草もして

探梅

何となくそとなつかしき日和かな友いさなひて梅やたつねむ

紅梅

をとめ子の口紅に似る梅の花ひらかぬほとこのいろそゆかしき

雨中見梅

のとかなる日をまちつけて梅見にと出れば雨そ降いてにける

月前梅

夕ぐれの庭にはほこりし梅のはなふけては月にひかりけたれぬ

池邊梅

池にあそぶ鴨の青羽にか、りけりみきはの梅の花のしらゆき

旅宿梅

いくたりに香をわかつらむたひやかた床にいけたる一枝の梅

窓前梅

寒しとて開きおくれし窓の外にいつ咲きつらむ梅のはつはな

梅の花に雪のふりかゝりたる

梅の花今朝は折らむと思ひしを起き出て、みれば雪そ積れる

をりにふれて

梅か枝に花とのみふる白雪はかをさへおのれしめむとやする

雪のいとうるはしうつもりて晴れたるに月もみちたる影さやかなる
夜公任卿の歌をおもひて

雪わけて梅の花をりししみそのふの月夜もかくや白けたりけむ

月の瀬にもおして

おほろおほろ照る月の瀬の春風は梅のにはひの動くなりけり

春風

みうたけに召されて歸るますらをの酔のおもてに春風そ吹く
さくら咲く春とはなりぬ風の神はなの散るまでこと國にいね

野春風

そことなく吹く春風にそらまめの花の香たかく匂ふ野邊かな

海上春風

わたの原行きかふ舟の帆かけにもほのかに見ゆる春のはつ風

春曉月

蛙なくやま田ほのくあけそめぬ花にねふれる月をのこして
花の旅おもひたちぬるあかつきの門出うれしく月のおくれる

春雨

めつらしとわか聞き流す春雨を田畑にかけてしつは見るらむ

春雨静

朝かすみいつしか雨になりぬらむつゆこそ見ゆれ庭の芝生に
つれくと降る春雨の音聞きて晝もねふたくなりけるかな

海春雨

春雨になみの花さへうつろひてゆふへしつけき海のおもかな

山家春雨

はるさめのしつかにそく草の家に山かたな研く音の聞ゆる

春眠聽雨

春雨のおと聞きなから文机にいねふるほとこのこちよきかな

都春曙

上野山くろく見えけりほのくと白みそめたる花の木の間に

霞中雲雀

不二のねの雪はさなからはるくと霞む裾野に雲雀鳴くなり

春雉子といふ御題を案する折から吹上の方になく聲の聞えければ

九重の御苑の雉子も子をおもふ闇のまよひはかはらさりけり

春 駒

人みな衣かへする春されはこまの毛いろもつや、かにして

海上 歸雁

岩木たく船のけふりのあとになりさきになりても歸る雁かな

燕

はけしくも走る大路の小車をく、りぬけても行くつはめかな

蛙

かしましき小田の蛙もひとしきりなけはやみけり人言に似て

夕 蛙

ゆふつく夜かすみはてたる池水のそこともわかす蛙なくなり

若 鮎

山川に老いて何せむわかあゆのわかくて御食となるそ汝か幸

蝶

うるはしき羽根し持たすは奥山の蝶は網にもか、らさらまし

櫻 草

さくら草つみにや行かむ吹く風はよしあらかはの堤なりとも

野 董

春ことにおもひいつるはふる郷の伊勢の能褒野の董なりけり

苓 箐

世につれてかたみに戀の變るかな董つむ子もつみいる、籠も

わらひ

手もすまにわらひ折るまは鶯のさへつるこゑも耳にとまらす

行路歌

人皆におくれてたとるわか手にもうれしく折りつ野路の早蕨

菜花盛

大そらは縁に晴れてはるくとす、な花さく野邊のさやけさ

雛祭

さ、けものまかなふほとは幼子もおとなひにけるひな祭かな
うつくしまらうとさねにならはれて負色見ゆる雛たなの桃

舞

ひさかたの雲居の庭の五せち舞ひ、なまつりにしのふ春かな

待花

風さむみ老はこもれと世のなかは花まつ春にはやなりにけり

八重櫻

みうたけのとき待ちつけて濱殿に咲きほこりぬる八重櫻かな

春情在花

よの人のこゝろを春になすものはた、一花のにほひなりけり

折花

見れと見れとあかぬ餘りに折りつるを心なしとや花は思はむ

曙櫻

曙のつゆにしめれる花の香のなまめかしさそ似るものもなき

朝花

かきりなき春のねむりをこゑなくてさますは庭の櫻なりけり

夕花

人はみないにし夕の花のもとにおもしろけにも遊ふかはほり

霞中花

なか、らぬ花のさかりを大かたは霞にのみもへたてられつ、

風前花

湯浴をへはしるしをれはおはしまの花の香さそひ夕風を吹く

深山花

とふ人もなきおくやまの花かけをひとりしめても駒鳥の鳴く

田家花

咲きたわむ花ひともにかくれけり麥生かなかのしつか伏庵

漁村花

海苔ほすと海士かひろけし沙原のよしすの上に花を散り來る

溪に花見ゆといふことを

こまとりの聲おもしろき谷かけにひとむら見ゆる花のしら雲

春人々と水神の森のほとりの家にやとりて河邊花を

すみた川花と月とを夕しほのみちたるかけにうつしてそ見る

瓶花

うれしくもこよひの雨をのかれけり瓶にさゝる、花のひと枝

花下醉客

足もとはしとろなれとも家つとの花の一枝ははなたさりけり

花下饒別

咲きちるもめてたき花の木のもとに皇軍人の門出をそいはふ

旅中花

いそかすは車おりても見まほしき花の木陰の多くもあるかな

花三分開きけるころ雪いたく降りつもりけるに上野にもにして

なか／＼にまことの雪の降りてこそ櫻の色はさやけかりけれ

しら雪の折りつる花をうれしけにかさして歸る人も見えけり

明治四十五年四月四日吹上御苑の花拜觀のをり不二見臺にのほりて

御苑生の臺にのほり見さくれは不二ましろなり花ましろなり

故郷なる菰野山のわか住みすてし庵の櫻今年は殊に花多くつきてあ
まりにうるはしけれはとわさく其よし知らせおこせけれは

すみすてし今年は花の麗しく咲けりと聞くもあはれなりけり

此たよりしつる翁は日頃は花のあはれなとかけても知らぬさまなり
しをかくふりはへて知らせけるかいとくうれしくて

みるかけもなき水莖の上にこそいと、まことの色は見えけれ

花 半 落

見る人のさかりをよきて來て見れば花さへ半散り過きにけり

落 花

野に山に春をたつねてわかやとにかへれば庭の花を散りしく

つかさ人まかてはてつる夕くれのみそのしつかに散る櫻かな

花のちるを

まれになりしけくなりつ、散る花を獨まもりて今日も暮しつ

月夜に花ちる

おほろよの月に散りかふ櫻はな目には見えねと袖にたまれる

雨の降る日御苑の花のちるを見つ、

花ひらの散りてか、れる青柳をいとさくらかと思ひけるかな

池上落花

水鳥はうかはすなりし池の面に波をたて、も散るさくらかな

落花入窓

心なくあけたる窓にはらくと散り來る軒のやまさくらかな

大正三年の春は宮中御兼題も興風會のも共に落花なりけりさるをか
しこくも大宮かくれさせ給ひいづれも詠進せすなりにけれは

花散るといふ歌占のまさしくてかなしき春になりけるかな

四月十七日の日記の中に

たかむなと呼ふこゑすなり花のゆき散りつもりたる都大路に

ある日

すみた川つゝみの花はくれはて、かはつなくなり水神のもり
降る雨にぬれて過ぎ行く小車のほろの上しろく花そつもれる
をりにふれて

知らぬまに月こそほれうくひすの鳴きくらしたる花の梢に
目に見えぬにほひはかりはゆるしてむ花なさそひそ春の山風
あまりにも分け入りすきて芳野山花なき峯に出てにけるかな

暮山躑躅

早蕨もみえすなりぬるゆふくれの山にもゆるはにつゝしの花

大木伯夫人幸子の君の庭園のつゝし見に來とありしかは行きて昔な
からの山をめぐりて

故郷の山にかへりしこゝちしてうれしき今日の庭めぐりかな

大木の茂れる山そはに白きつゝし咲きみたれたる得もいはず

故郷の雪のやま路もしのはれぬつゝしわけつゝめくる園生に

水邊山吹

もみち山めくるみほりの青淵に咲きなひきけりやまふきの花

溪山吹

河鹿とる子らか手ふれて一むらのやまふき散れり溪の岩ねに

ある日

降る雨に花はおほかた散りはてゝ露にしなへる庭のやまふき

牡丹

あたらしと拾ひ來にける一ひらにこもるあはれも深見草かな

はなといふ名こそ櫻にゆつりつれしめし位はゆるかさりけり

藤花

のとかにも藤の花房ゆらくなり暮れゆく春も知らすかほにて
この春はうなるか手にもと、くまで咲きしたりけり棚の藤波

山路藤

山猿かよちのほりてや折りつらむ道に落ちたり藤のはなふさ

顔簷挂古藤

かたふけるふるやの軒に藤の花いくとし波か咲きかゝるらむ

紅葉山にて

人は手もふれぬみその、藤波の花にすかるのこゑにくきかな

春朝

花見にと友にちきりし朝のみうくひすまたて起き出てにけり

春夜

たにく、のつまよふ聲もにくからす片山さとおほろ月夜に

春富士

齋きまつるその神の名の木の花の咲けるか如き春のふしのね

春海

鳴きかはしかもめのおそふあたりのみ波は見えけり春の海原

春波

あつさゆみ春たちしより浦波の花はさかすもなりにけるかな

春野

牛ひきて過ぎ行くしつか姿までのとかに見ゆる春の野邊かな

春田

みいくさに馬も若男もめされけむいものみかへす春の小山田

明治三十七年

春 舟

すみた川花見の舟にはからすもおもふ友とち乗りあはせけり

春 鳥

都鳥むれてたちけりつ、みよりうちおろしたる花のふ、きに

春 薪

山賤か手折りて添ふる花の香にたき、も過ぎし春しのふらむ

春 旅

鶯のこゑにひかれて行く旅はあしのつかれもおもはさりけり

春の旅のうたの中に

長閑なる春の旅路の樂しきに惜しきは富士の見えぬなりけり

春 述 懐

春の夜の短きをのみをしむかな長きひるまをあたにすこして

うるはしきわか木にましる姥櫻春知りかほのあはれなるかな

春日待友

契りおきし友まつほとにわか庭の花は残らす咲き果てにけり

菰野山に住みそめける頃ものより歸るさ

よのなかの春にはあそひあきにけりいさ鶯とやまこもりせむ

遠山稻子としての葉山のつばぶきに歌そへて得させける鸚鵡かへしに

しきしまの言の葉山は春風のふきのかをりも世に似さりけり

ものへまかりける道にて

山はたの鈴菜わけ行く花よめの袖にむつれて飛ふこてふかな

春のころ山里にもものして

たつね来てまつうれしきは山口にわれを迎ふるうくひすの聲

題しらす

富士のねのうつる山田の面見れば人はみゆきをすきかへしけり

夏歌

なつのはしめに

山吹の散りてなかれしやり水にこゝろのうつる夏は來にけり

首夏雨

をとめ子が新桑つみて歸りにしあとしつかにも雨そゝくなり

首夏の庭を見て

樹々はみな若葉しけりて白つゝしにほへる庭のけしき涼しも

庭のをりをり

さくら草はるのかたみの色あせてのこれる庭に雨降りくらす

四月二十二日あらし山にもおして

あらし山花におくれしくやしさも若葉の風に吹きはらひけり

紅葉山のみそのをめぐりて

今日見れば御堀は鴨のかけ絶えて蓮の青葉そうかひ初めたる

薄 暑

にはかにも暑さおほゆる今宵かな窓の夜風のこゝちよきまで

更 衣

みや人が衣かへするこのあしたあやにく風の寒くもあるかな

雨中新樹

糸のこと降る村雨に水枝みなひきのはさるゝこゝちこそすれ

田家新樹

しつのめか米とくせとの井戸端もをくらくなりぬ柿の若葉に

茶 摘

足ひきのみ山少女も髪あけて木の芽つみにと宇治に行くなり

高崎大人のみもとにて初時鳥を

師の君の耳に入るまでこゑたかくなのれ今年の初ほとゝきす

獨聞郭公

待ちわたる心や空にかよひけむわれのみ聞きぬ初ほとゝきす

菰野山にて郭公を聞きてよめる中に

ほとゝきす鳴く聲かなし何事か思ひせまれるゆふへなるらむ

瀧子の君と増上寺にまうて、

しけりあふ青葉のおくのあらゝきをあふくをりしも鳴く郭公

郭公を聞きて友にといふことを

君にとて文かく窓にほとゝきす鳴くは言つてせよとなるらむ

明治四十年六月十六日午後二時郭公の聲を聞きて

いつこそと耳たつるまに時鳥をしくもこゑの絶えにけるかな

葵 露

神山の二葉あふひの露みてもうるほひしけき御代をしるかな

花 菖 蒲

つはめとふ里の小川に花菖蒲ひとむら咲くもなつかしきかな

蒲田の花菖蒲見にまかりて玉の臺といふ名つきたるかあれば詠める

かりそめのよしすのかけもうちとけて遊へは玉の臺なりけり

歸り路羽田によりて干潟に遊びけるとき

うなるらに追はれてにくる芦蟹のあなおもしろと老もうかれつ

稻荷橋のほとりにて

ゆあみしてかへる羽田のいなりはし汐みちわたり夕風そ吹く

桐 花

けたかくもさける梢のきりの花下行く眼にはとまらさりけり

櫻

すかるなく聲にあふけは花あふち咲きこそにほへ山かけの庭

螢

みたれたる岸のほたるは河風におとなくあかる花火なりけり

海 邊 螢

うちよする波をあなやと避くるまに螢は遠くのかれけるかな

波の上にもゆる螢を不知火の知らぬかけにもよそへてそ見る

河 邊 螢

くひな鳴くこゑとめ來れば水きよき小川なかれて螢とふなり

窓 邊 螢

それと見て子とも呼ふまに窓の外を遠くはなれて行く螢かな

献上の螢を見て

大まへにひかりをはなつ螢こそ人にまされるほまれなりけれ

谷梅雨

谷かけの木こりの小屋はあま雲のやと、なりにき梅雨のころ

田中瀧子の君より梅雨のうたおこせ給へるかへしに 大正三年

月も日も雲にかくれてさみたれの晴る、ひまなきわか心かな
天の下みな袖ぬらすさみたれもわか身一つに降るこ、ちして

蟬

ち、となく蟬の音かなしあけまきかさす藪棹に又か、りけむ

菰野山にかへりける析に

雨晴れし山のこすゑのつゆよりも風にまつ散る蟬のもろこゑ

月前水雞

わか苗の露を照らせる月かけにす、しさそへて水雞なくなり

夏草

幾度かしつかとかまに刈られけむ野邊の夏草わかみとりなる

蚊遣火

月ふみて野守か庵をたつぬれは蚊遣はかりそうちけふりたる
軒にたつ蚊柱を見てうなるらかおもしろけにも蚊遣たくなり

百合花

とつ國の園にもいまは咲きにけりやまと島根のひめゆりの花

雨中撫子

すなほにも生したてつる撫子のをしくも雨にくねりけるかな

水邊撫子

里川の蛇籠の目よりはひ出て、咲けるもあはれなてしこの花

夏草花

とづくにのちくさの花にましれとも色はおくれぬやまと撫子

待 雨

ふりけたむけしきも見えず雨を待つ人の思はもえまされとも

かみなり

なる神に母かむねこそと、ろかめ外に出てし子の上を思ひて

遠村夕立

間近くは手もかさましをあるほせる田中のさとに夕立の降る

避暑

いつこにか暑のかれむ名くはしき海邊やまへは人のしめたる

夕 納 涼

夕くれの納涼のゆかに待つものは月と風とのまらうとにして

涼 風

宮つかへはて、まかつるはす池の御門ふきこす風のす、しさ

竹 風 夜 涼

かよひ來る風のすかたも月かけに見えてす、しき窓の竹むら

樹 陰 納 涼

たちよらは大木のかけの蔭をす、みのゆかにおもひ知るかな

船 中 納 涼

吹上のみその、池にふねうけてす、みし去年の夏そこひしき

をりにふれて

廣からぬわか庭なから床すゑてす、むゆふへそ夏はたのしき

短 夜 月

みしかよは月も心のいそくらむ日のあるほとに山を出てつ、

山 家 夏 月

月を見るわか山窓はせはけれとす、しきかけは庵にみちけり

樓上夏月

高との、をすまきあくる薄もの、袖にすき入る月のかけかな

舟中夏月

涼舟のきにかけたるともし火のかひなきまでにてらす月かな
船蒸ひもとみにさめけり沖つ波す、しくてらす月のひかりに

晒書

とり出て、さらせる書の紅紙はあせたる色もなつかしきかな
むしほしは今日も半そ残りけるふるき書ともひろひ讀みして
虫干に取り出て、見ればふる小袖いま流行なる色もありけり

草花先秋

秋風もまた立たぬまに七くさの花はおほかた咲きそろひけり

六月の節折に

大君のみたけをはかる吳竹のよことに千代をこめてきるかな

夏朝

上野山わかば吹きこすあさかせにはすの露ちるしのはすの池

夏夕

今日の日の重荷おろし、こ、ちして夏は夕そうれしかりける

田家夏夕

草とりし門田の水にさす月を見つ、やしつはゆふ餉たふらし

夏雲

ひとむらの雲のかけをもたのむかな照る日盛の大路行く身は

田家夏雨

祈りつるしるしまさしき雨を得てひと日にきはふ小山田の里

夏 河

まなひやをまかつるやかて夏川に水あみすなり里のうなるら

夏 渡

わたし舟のれはやかてもす、しきは暑を岸におきて來つらむ
日さかりは來る人なしと渡守わか手まくらにふねやこくらむ

夏 野

日さかりは風も通はすなりはて、わくるものなき野邊の夏草

夏 杜

日くらしの晝もなくまでおひしける杜の木陰は夏なかりけり

夏 田

虫送こよひもすらしたいまつのかげこそつ、け遠の田つらに

夏 畑

瓜なすひ日々にみのりてたのしみのおほきは夏の畑なりけり

夏 園

ことくにの花もむろより出されて園にきはしき夏は來にけり

夏 山居

谷かけの木こりの家も貴人にうらやまる、は夏にそありける

閑居 夏

さひしさになれたる庵も夏の夜に風のはぬは苦しかりけり

夏 農家

から棹の音おもしろくきこゆなりす、しき月に麥やうつらむ

夏 寺

まうて來て阿迦くむ袖に吹く風はこのよの夏をまつ拂ひけり

夏 松

庭守かはさみ入れたる松見れはころもかへせし心地こそすれ

夏 柳

川添にしける老木のやなきかけひるは子守のしめてけるかな

夏 窓

すむ人のこゝろの奥も見ゆるまで明けはなちたる夏の窓かな

夏 燈

賤の女か蠶飼のわさやはけむらむ夜更けて見ゆる納屋の燈火

夏 衣

蟬の羽のうすきもあれと着こゝちのよきは晒の浴衣なりけり
たわやめか流行をきそふ薄きぬの心までこそ見えすきにけれ

夏 蕙

破畳目にたつ夏になりにけり敷かはやひこのあらめむしろを

夏 氷

手にすれは暑もとみにわすれけり玻璃の器にもれるけつり氷

夏 果

花よりも實のうるはしき楊梅を子らかをしへの種にとりてむ

四月二十九日時鳥といふ草の花咲き初めければ薄墨色の小色紙に包み御内儀にもて参りければみたまの前に供へさせ給ひけりとかや 大正三年

をりからのしのひかたきにしのひねもそへてさゝけむ初郭公

をかしき扇を給りけるかしこまりに

家の風ふきあけむ占のうちはかとうれしかりけり今日の賜物

をりにふれて

故郷の山なつかしくなりにけり初ほとゝきす待つにつけても
えりあけてむかへてましを風のこと人の心もすゝしかりせは
世のなかは夏の家居のあけはなち隔なきこそ住みよがりけれ

秋歌

初秋虫

あつしとて人は扇もおかぬ夜を秋になしてそむしの鳴くなる

初秋柳

しらぬまにつはめはいにて門柳やつれし陰にあきつ飛ふなり

をりにふれて

一葉つゝ散るたひことにさひしさの添ふこゝちする庭の青桐

早涼

いつこにかあつさ避けんと旅衣たちまよふまに秋は來にけり

秋蟬

ちからなき蟬のこゑこそきこゆなれ秋のゆふ日の残る山邊に

孟蘭盆に

火影見てうちゑむ乳子はなき親の魂祭とも知らすやあるらむ

虫聲近といふことを

虫の音もまくらへちかくなりけりむら雨そ、く秋の夜寒に

夕 螢

秋の夜は泣かる、ものをきりくす暮る、遅しと競ひてそ鳴く

月 前 虫

月かけのさやけき庭にしらつゆの玉をまろはす虫のこゑく
月影のみてるこよひはくさむらの虫も鳴く音を惜まざるらむ

少女虫を聞きたる。

しはらくは我うたやめて少女子も聞き入りにけり庭の虫の音

奈良の春日山の鈴虫を籠に入れてかしこより大前に奉れるを見て

鈴虫のす、しきこゑをふりたて、御前に何をきこえあくらむ
えらまれて御前に出る鈴虫はうれしき音をやふりたて、鳴く
をりにふれて

おりたちて耳をすませはなかくに聞きわきかたし庭の虫の音

螢 草

ほたる草秋たつ園に咲きそめてひかりす、しくむすふ露かな

みそはき

知らぬまにさかりとなりぬ白鮫のほる小川のみそはきの花

朝 顔

あさかほのつるはさかえて袖垣の裏まで花の咲きにけるかな

夕 朝 顔

あすさかむ花をよむとてゆふへまでしたしくなりぬ垣の朝顔

萩

散れはまた咲きかはりつ、萩の花いくたひ見する盛なるらむ

折萩

萩の花いろよき枝はをりつれとたれにかやらむわれ旅にして

野萩

うつろはぬえたを枝をとえらむまにとほく來にけり秋の萩原

禁中萩

大前のをすもる風にゆらくらむたまのみはちのあきはきの花

尾花似波

新はりの磯田のくろの花す、きむかしにかへる波かとそみし

栽女郎花

女郎花知らぬ園生にうつされてものをや思ふしをれかちなる

花籠に秋草いけたる

投入れし籠のきちかう一もとに野邊の千くさの色も見えけり

瀧子の君と芝公園にもせしに秋草はさかりすきけれと

七くさの何はなくてもおもふとちめくるかうれし芝のはな園

萩といふ題にて近藤貴子より「聞き知らぬ子らか爲にと植ゑし萩此ころ風にそよき初めけり」とありけるに

たらちねの心つくしの浦風もこのをきか葉のそよきにそ知る

庭を見やりて

檜扇のはな咲く見てもこひしきはくもるの庭の秋のはなその

湖上雁

し、みとる舟のむしろ帆横きりて志賀の浦わに落つる雁かね

行路雁

いそき行く我をあとよりよひかけて先になりけり雁の一つら

禁庭曉月

宿直人ものしつかにもまかて來るみはしにあはきあか月の影

野 曉 月

曉の月をたよりにしつの男ははや野に出て、ちかや苺るなり

社 頭 月

靖國のさくらのもみち散りそめて月かけあかし神のひろまへ

海 上 月

ひるよりもさやかに沖の見ゆるかな月の光のなみにうつりて

野 月

鳴く虫のはねするさまも見ゆるまで野原をてらす秋のよの月

都 月

ちよろつの火かけはあれとなきまでにてらす都の秋の夜の月

田 家 月

あけまきか刈りし薄をひとつかね月にさゝくる小田のふせ庵

月 夜 越 山

われひとり越ゆる山路とおもひしに谷河つたひ月も行くなり

月 前 鴨

鳴きつれて鴨はたちぬる池水にくたけてのこる月のかけかな

鍋島夫人より月も雨になりてといひおこされける御文のみかへしに 大正元年

くれまとふ心のやみにこの秋は月のよころも知らて過ぎにき

南郷柳子の君のもとに月見にもせむと契りつる背しも雨のふりて

十時頃晴れたる空をうちまもりて
更けて後晴れむと知らは背の間の雨にぬれても訪ふへかりしを

またの夜同邸に月見にものして

かきりなく廣き園生の何處にもおもむきかへてすめる月かな

九月二十三日は舊八月十五夜にて月いとよかりければ五番町より九段あたりまでそゝろありきしておもひつゝける

ちりはかりかゝれる雲もなき月をいく秋まちて今宵みつらむ
そらたかくあかるまにく御園生の松の葉越になれる月かけ
枝に見えこすゑに見えておもしろしみほりの松の秋のよの月
みほりめくる車なからにあふき見る人もいくはく松の上の月

波の上の月てふ御題案しけるをりにおもふことを

うつせみの世はかくあれや月影のさす方にのみ波の見えける

をりにふれて

沖遠くたちへたちたるしら波は月に見るこそさやけかりけれ
結ふ手の水にもうつる月かけを空のものともおもひけるかな

深山霧

染めわたす峰の紅葉をこく薄くたちへたてゝも見する霧かな

行路霧

越えてゆく峯のしをりと仰き見し松も霧にそかくればてぬる

鹽原にて

谷ふかく霧はしつみて朝日かけさしのほりけりみねの松はら

山路秋行

わけいれは分け入るまゝに樂みのふかきは秋の山路なりけり

深夜秋風

小山田のかりほの火影またゝきてなるこにあたる秋のさよ風

秋雨

色つきしなつめこほれて苔の香のさむきゆふへに村雨の降る
降る雨のしつくとともに柴栗のしはく落つる音そきこゆる
栗の實は拾ひつくしていかのみのつもれる庭に小雨そほ降る

草庵秋雨

いろつきし軒端の柿につゆ見えて雨の日さむきくさの庵かな
しめくと降る村雨にむし鳴きて晝もさびしき草のいほかな

秋雨さむき日例のこもり居て

みそのふの菊に紅葉にあこかれし秋なつかしき昨日今日かな
をりにふれて

生垣のぬかこもいつか落ちはて、秋の雨さむしやまかけの庭

鹿の聲とほし

峯かへて妻やとふらむ昨日より今日ははるけし小男鹿のこゑ

鹿の聲まれなり

まかなちにきり開かれてわか山の鹿のね稀になりけるかな

栽菊

山田守るしつか庭にも菊植ゑてたのしむ御代の秋そのとけき

山菊

山菊の花あはせしてをはり人たのしむころになりけるかな

天長節に菊露といふ御題にて歌奉りける序によめる

うれしくも袖にか、りぬゆるされてめくる御園の菊のしら露

菊の花を人におくるとて

ことのはの種にとおくる一枝はやかても君か千代のともなり

山菊を人のもとにつかはしける後に

世に出て、いかなるさまに咲きぬらむみ山そたちの白菊の花

おなしころよめる

ふるさとの庭にも今やにほふらむわか植ゑおきし山菊のはな

遠山英一君わか庭の菊見に来給ひて後に歌がすく給ひければ

言の葉のほひにまけて菊の花千代をも君にゆつるへらなり

山菊の盛に朔子かとはむといひおこせけるに雨降りければ來すなり
にしに詠みてつかはしける

白菊のゆきにこもりて待つわれを雨になかして訪はぬ君かな

舊九月十三日夜月もいとよかりけれと寒ければ窓をさしつ、大正元年

更くるまで月にはまとをさ、さりし昔こひしき秋のよはかな

稻舟

をさな子もかたへに乗せて夕まくれあきの田川をくたす稻舟

雨中紅葉

降る雨を何厭ひけむもみちはのまことの色はぬれてなりけり

雨後紅葉

雨はれしあしたの庭のもみち葉のした、る露に日影さすなり

田家紅葉

たちめくる梢みながら紅葉して小鳥さへつる小田のひとつ家
簾かけのかへての大木もみちしてあかるくなりぬせとの細道
うるはしき紅葉の枝にをしけなくをしねかけたり小山田の庵

濱離宮の山吹土手といふところの山吹の葉のいとうつくしう黄はみ
たるを見て

うるはしく染めたるきしの山吹はふた、ひ春の影そうつせる
をりにふれて

今すこし染めてと思ひたゆたひし紅葉を人に折られつるかな

山水秋深

むすふ手にしみ通るかと思ふまでつめたくなりぬ秋のやま水

秋夜

かなし子の衣縫ふ母は秋の夜のふけ渡りしも知らすやあるらむ

秋山

朝きりもいまたかゝらぬ秋山にはやたけかりの日を數へつゝ

秋 水

ひとすちの少女の帯に似たるかなもみち散りうく庭のやり水

秋 湖

鹿のねもとほくきこえて二荒山みつうみしろく月照りわたる

秋 渡

秋の夜の空もすみたのわたし守世わたりなから月や見るらむ

田 家 秋

學子のふみかく種もゆたかなりやま田のさとの秋のさかりは

秋 庭

染め出てむ紅葉まつまのわか庭のにしきは萩の一むらにして
めしろ鳴く驛にあふけは二つ三つはやいろつきぬ庭の柿の實

秋 燈

みそらすむ秋にしなれは霧こめてともし火くらし川添のやと

秋 果

たけかると山路わけ入る少女子か袂にふれておつるつくはね

秋のある夜に

照る月のしづくにぬれてかはらさへ玉の光と見ゆるよはかな

内にめされつるとしの秋思故郷といふ題たまはりければ

故郷の野邊にはいまやなゝくさの花咲きみちて虫の鳴くらむ

をりにふれて

嫁菜菊今をさかりと咲きぬれと母もいまさすひと訪ひ來す
願はくは手植の菊の枯れぬ間に母もかへりて見ませとそ思ふ

冬歌

初冬月

むらしくれ晴れたる庭のつはふきを照らすも寒き月の影かな

初冬庭

しのひつ、うくひすも来て遊びけり小春日和の庭のまかきに

小春のころ

朝霜のとくるけふりものとかにて小鳥さへつる冬にはかな

時雨

日影さす杜にといそくむら鳥のあとおひすかひ降る時雨かな

夕時雨

あすもまた日和とあふく夕やけの空にひとむらふる時雨かな

山時雨

村時雨おのか染めつるもみちはの色見むとてか山めぐりする

山路時雨

しはしとて時雨をよきし深山路の木陰はやかて紅葉なりけり

行路時雨

辻車からく見出て、乗るひまに行き過ぎにけるむら時雨かな

海邊時雨

磯崎のいほにかけほす青海苔を時雨に今日もまたぬらしけり

庭木枯

もみち葉はみな散りはて、木枯の聲のみのこる庭そさひしき

落葉

うつくしき紅葉を子らはひろひけり母か箒のもとにより來て

落葉深

深山路はもみちの落葉ふかくして草履も泥にけかれさりけり

朝落葉

しもけふる朝の庭にきらくと日かけにほひて紅葉ちるなり

風前落葉

かにかくに散るもみち葉を吹く風に任せて見るもおもしろき哉

紅葉散風

我をしむ心も知らてもみち葉はおもしろけにも風に散るなり

雨後落葉

ひとむらの時雨は晴れて照る月のひかりの上にちる紅葉かな

海上落葉

染めつくす磯山紅葉しらなみの花のうへにそ散りみたれける

をりにふれて

冬かれの落葉に似たる言の葉はかきあつめても色なかりけり
しくれにも風にもなれてねふる夜のゆめおとろかす玉霞かな

川水鳥

富士川の早瀬になれしあちむらは流れなからに友とあそへる

寒樹

木の葉みな散りての後に見ところの多きにはの樺なりけり

冬月

撒水のこほれるまゝに暮れはてし大路さむくも照らす月かな

湖上冬月

比良の峯の雪よりさむしみつうみに更けてうつれる月の光は

谷冬月

こからしに木の葉のこらす拂はれて谷底ふかく月そさし入る

寒月

うちかすむ老のまなこも射るものは冴えたる月の光なりけり

寒夜月

目に見ゆるものみなしろし冴ゆる夜の月の光や霜となりけむ

寒月照梅花

さやけさをくらへかほにも見ゆるかな冴ゆる月影匂ふ梅か香

嚴寒

さゆる夜はわかきる衣にさはるさへ氷にあたる心地こそすれ

埋火忘冬

おもふとちまとるせる夜の埋火は心までこそあたまりけれ

見初雪

めつらしく晴れたる西のそら見れば初雪しろし秩父甲斐か峰

連山雪

をとめ子かくろかみやまもふり袖の赤城も白く雪そつもれる

里雪

はまそひの里のかきねに貝殻のつけるかことく降れる雪かな

田雪

白雪のふりぬるときそ小山田のかしは人になりすましける

馬上雪

しひしはの重荷をはこふ深山路の馬の背しろくつもる雪かな

雪中松

おもしろき風と雪とのあらしひを見せてもたてる峯の松かな

深雪のけしきを寫眞にとるを見て

種板にうつしとられて白雪もはしめて消えぬものとなりなき

ある日

いとさやに見えつる富士の俄にも隠ろひはてぬ吹雪すらしも

をりにふれたる

谷かけにかり人さけふこゑすなり雪になやめる鹿やおふらむ

早梅盛

火桶のみ親しむほとに早咲のうめはさかりになりけるかな

寒椿

高き香を梅にゆつりて玉つはき葉かくれに咲く色そゆかしき

古巢鶯

白雪のふるすに籠るうくひすもわかこと春や待ちわたるらむ

深夜神樂

笏拍子うつ音すみて聞ゆなり月冴えわたるかしこところに

煤拂といふことを 明治三十七年

疊うつしもとの音もたゝかひのにはおもほゆる年のくれかな

としのくれに

年々にとしの一年過ぎ行くかはやくなりぬるこゝちこそすれ

田家歳暮

手づくりのしめ引きはへて里人か年待つさまのうら安けなる

歳暮市

來むとしの幸をしめなはまつかさり大路せはしとかさる市人
店毎に飾る羽子板いかのほりいかにうれしと子らは見るらむ

冬朝

小車のうははしりする音すなりみちの朝しもこほりはてけむ

冬夕

朝よりかき曇りつゝ、さえし日の雪にもならず暮れにけるかな
かけさむき夕日さすなり一むらの時雨過ぎ行く庭のこすゑに

閑居日永

とふ人もなきかくれ家は冬の日を永しと思ふをりもありけり

冬山

たきつせのみななみ遠く見えすきて冬おもしろき山の奥かな

冬海村

ほすあみのあらめの衣ひとつにてさむさも知らぬ伊豆の島村

冬溪

高根よりおろすふゝきにをりくはよき日もくもる谷の下庵

冬林

ひとすちの流も遠く見えすきて冬おもしろきさとはやしかな

冬 閑 庭

かれくさの種をついはむ小鳥よりほかに聲なきやまかけの庭

冬 鶏

木枯の寒きあしたもとや出つる時はたかへぬにはつとりかな

寒 鴉

むらからすあらそふ聲そかしましきとりのこしたる柿の梢に

田中某が轉宅のしらせに「霜はしらふみて澁谷の冬かれをとふらひ
來ませわが庵まで」とありて番地などはなかりければ

ふりはへて訪はむとすれと道そなき田中のいほの霜深くして

雜 歌

山 中 日 暮

日は暮れぬ吹き來る風も何となく雨をふくめる深山路にして

谷 雨

水のおとすこくきこえて雨の日は雲のみかよふ谷かけのみち

田 家 雨

たなつものなやに納めてのとかにもあめの一日をいこふ里人

篷 窓 雨 滴

雨たりに袖はひつれとめつらしき船路は窓もさゝれさりけり

海 大正四年十二月

あまをふね數こそまさされ新海苔やとりはしむらむ大森のうみ

海邊

漕きつれて行く舟見れば呼ひとめて我も乗せよと言はまほしかり

島

わか船のむきやをりくかはるらむ見えかくれする沖の島山

望遠帆

眞帆あけて追手に走る舟見れば乗らぬ我さへこちよきかな

曉漁舟

あかつきのすなとり小舟幸を得て歸る帆かけに追手吹くなり

滯標

船虫に身をはくはれてみをつくし波のうきせに幾代たつらむ

社頭

みやしろのいつこはあれと御國人まつまうてなむ伊勢の大神

社頭松

こゝのかしこところの松風はたゆる時なき御神樂にして

故郷

なにならぬ人のはなしも故郷の事とし聞けはなつかしきかな

山家

世の中をへたての垣はゆはねとも訪ふひともなし山陰のには

山家松

山松の木かけしめたるわか庵はたきも千代の落葉なりけり
月雪にこゝろもとめぬやまかつか軒にはをしき松のひともと

山家杉

しらぬまに芽生の杉ののひたちて背戸は林にならむとそする

山家灯

ともし火の光もれ来てやまかけの家居は夜そあらはれにける

田家隣

ひとまちの畑をさかひのとなりとち心に垣もむすはさるらむ

漁村

あまか家は大方ひゝの垣根なりこのいそ村も海苔やとるらむ

閑庭竹

このきみのほかには友もなかりけり人氣はなれし山陰のいほ

谷古橋

山人のわたりしあとも見えぬまできくらけ生る谷のふるはし

水

人の身は暇なきこそよかりけれ水もたゆめはあかそたまれる
底ひまで透き通りたる山の井の水はありとも見えぬなりけり

道

人の行くまことのみちの一筋はやまとのほかの國もたかはし

坂 大正五年

身に過ぎし重荷おろして老の坂のほれはかろし足もこゝろも

畑

もろこしの畑にしけれるたか黍もわか皇軍のたてとなりつゝ

門

うなるらかあそふところとなりにけり誓もひろき法の御門は
たらちねの母か庵にたてたきは千代も老いせぬ門にさりける

石

たなそこにてせてなつれはおのつからあたゝまりけり石の心も

行客

いくうきせ越えて來にけむ旅人そわたり待つまを岸に眠れる

深山木

のひらかに生ひたつ見れば奥山は草木までこそ住よかるらめ

松を見て

ころも縫ふ針はかりなる松の葉も茂れは雨ももらさ、りけり

松風

たから田の千代田の宮に千代しめて吹く松風の音ののとけさ
松風の聲き、わきてやまひとは明日の日和をうらなひにけり

杉

世に廣くもてはやさる、吉野杉ほまれは花におくれさりけり

橘の苗を學校の庭に植うとて

九重の雲居の庭のたちはなのかくはしき實をむすへうなるら

猫

曇日も時はたかへぬ猫の眼をかはるためしにたれかひきけむ
何のおとか聞きつけぬらむ我膝に眠りし猫はつといに、けり

兎

すき舟のすきしいさをはありなから龜におくれをとる兎かな

雞

搗きさして人はいにけるからうすにつまよひたて、あさる雞
のとかなる空うち仰きうち羽ふく鳥も雲井やこひしかるらむ

隣家雞

谷越にとりの鳥のこゑ聞きてとき知るやまの庵そのとけき

晴天鶴

天てらす日つきのみこの千代よはふ田鶴の翅に朝日か、やく

禁庭 鶴 大正四年冬

みそのふのたつは鶴とちうち群れてきこえあくらむ君か萬代

松上 鶴

濱殿にまれの行幸をまつかけの鶴はひと日を千代と鳴くらむ

鶴聲 高

ほのくと明け行く空に聞ゆなりよもきか園のあしたつの聲

曉 鴉

みその守宿直の衛士やまかるらむあかつき鳥なき初めにけり

都 鳥

すみた川すめは都とみやことり波のうきねもおもはさるらむ

新宿御苑の動物を見めぐりて鸚鵡を

御園生にかひならされてから鳥も皇國言葉をいひならひけり

蟹

あしかにのあしくな言ひそ横さまにはしるも親の教ふむなり

くらげ

波の上に浮ふくらげのなにならぬ身にも願はある世なりけり

燈

いなつまの光か、やく火かけにもひとの心は見えかたきかな
ものかたる友とはなしにしたしきは机のものともし火の影

玉

たはやすくまろふ玉たに突く人の思ふ方にはゆきかての世や

鏡

やかて世のか、みなりけり御鏡をたからとあふくくにの姿は

古寺 鐘

子守らか行きてをりくならすなり法師もすまぬ古寺のかね

車

おもしろく言ひまはしつ、世の人のこゝろをのする口車かな

水車

かけすて、ひとはねにける小夜中もやすますめくる水車かな

塵芥運搬車をみて

世の人の心のちりもとりあつめ積まむ車のあらはとそおもふ

蓑

此秋は小田のか、しにきせられて我身のはてや思ひ知るらむ

笠

日をおほひ雨をもしのく菅笠はしつかたからの一つなりけり

傘

たわやめかさす絹傘は日のかげの外に人目もよくるなるらむ

布

あら妙のぬのこ一重も着せかねて子に泣く親の世に多きかな

絲

世の中のうきふし知らぬ少女子かうれしけにひく新繭のいと

衣

身一つをつ、む衣もさま／＼に人のこのみはある世なりけり

袴

あて人もせるの袴をうかちけりをり目正しきものはすたれて

琴

少女子か習ふみやひの琴歌もうらとおもてはある世なりけり

櫛

黒髪をすきたるくしのあか見れは心もさそとはつかしきかな

机

あかなふに價もかろきはりぬきの机はやかてかみのたまもの

筆

目に見えぬ人の心もひととの筆のちからにうこかされけり
藻鹽草かきならしたる古筆はちひはてたるも捨てかたくして

紙

賤か身につけしつゝ、れも麗しき紙となりてそ世に出てにける

箒

こゝろにはまたちりもなき少女子か庭のをしへと探る箒かな

箱

何入れむためとはなしに美しき箱を得たるはうれしかりけり

釘

住みすてし人の心はこゝろなくうちたる釘のあとに見えけり

釣

世の中のことは大方つり糸の引きこゝろむるほとそたのしき

皇威發揚

いつこまで照りわたるらむためしなきわか大君の御代の光は

日章旗

月星のうへにかゝやく御國とは日の御旗にもしられけるかな

大賜宴

君かため死を願ひつる武士も今日はいけるかうれしかるらむ

時計

とまりたる柱時計はひとすまぬ空家おほえてさひしかりけり

さす針のまちくくにして時計賣る店こそ時はわかれさりけれ

眼鏡

たらちねの母か懸けつる古眼鏡かりて見るまで我も老いけり

圖書館

うへのやま花の白雪ふみわけてたつね入らはや書のはやしに

廢兵

御惠の露にいけるもあはれなり足のかたはとなれるつはもの

電話

いち早く言ふへき事をくやくもきれて後にそ思ひ出てつる

衛生

こゝろをも身をもきよらになす事は神の代よりの教なりけり

教育

敷島のやまとしまねは世の中の人のをしへのはとなりなき

瓦斯

織機の糸にはあらぬこの瓦斯もたてぬきにこそ引きはへにけれ

右

なにことも右に出てむと願はずは人にもさはる事やなからむ

力

筆のあと見るにつけても我なからおとろへはてし力をそ知る

湯あみ

湯あみこそいく薬なれ夏ふゆのあつさ寒さもとみにわすれて

破障子

新らしき家もいふせく見ゆるかなひと間やふれし窓の障子に
すむひとの心も見えてわひしきは窓の障子のやふれなりけり

老人

越えて來し浮瀬の程そ知られけるひたひによする波の戯にも

をさなこ

癖といふものまたつかぬ幼子のふりわけ髪のうちつくしきかな
美しき子を見ることに一人たに我もあらはとおもひけるかな
たらちねの名もまた知らぬ幼子か空泣はいつ覺え初めけむ

尼

み佛のちかひの舟にのるあまは藻鹽にかへて阿迦を汲むらむ

女

口なしといひなおとしそ女郎花言はぬは言ふにまさる色あり

渡守

みなひとの願ふ岸にとわたしもりわたせはなれも佛なるらむ

眼

人を射るまなこのうちに見ゆるかな弓矢かみにもはちぬ心は

髪

たわやめか流行をきそふ髪形名も知らぬ間にまたかはりけり

船中友

ゑひこ、ちいたはりしよりうき沈ともにと契る友も得てけり

雨の日友を待つ

降る雨はをやみかちにそなりにける此間に早く友の訪はなむ

農

敷島のやまと男の子の鋤跡にすきおこされぬくにやなからむ

秋大出水ありけるに農といふことを 明治四十年

田畑みなみつにひたりてこのあきは青人草もいろなかるらむ

日露の事終りける頃商といふ御題出てければ

み軍は勝ちてやみにき商人よ出て、た、かへうみにくぬかに

箴 入 を

籠を出て、箴入すなる子す、めのうれしけにこそ囁りにけれ
ねひまさるわか子の姿いかにそと待つらむ親を思ひこそやれ

仁

すへらきの御名となりぬる此文字のこ、ろや君の心なるらむ

日本女子の貞操といふことにつきて

われよりは秋風たてしからころもつまの心にうらは見ゆとも

歌

まこ、ろのこもれる歌は言の葉のことなる國の人もめつらむ

習 字

今日もまた机の島にた、ひとりかきくらしけるもしほ草かな
茶 道

ひとみなを汲みてたのしむ堀川の流は千代もつきせさるらむ
なつかしきもの

こ、ろなく開きし書のあひたより出てしむかしのともの玉章

素 盞 鳴 尊

よろつ代にさかえけるかな八重垣に神のまきけむ言の葉の種

神 功 皇 后

立ち返りまつろひにけり御馬飼と定め給ひし御代のむかしに

和 氣 廣 蟲

後の世のみやつかへにもおくれしと誓の舟に乗りやしつらむ

大 友 黒 主

たちよりて見るたひことにか、み山寫るは君か言の葉にして

宇治山喜撰

かくはしき君か言葉は宇治山の木の芽と共に世にかをりけり

在原業平

淺からぬ君かまことは小野山の雪のあとにものこりけるかな

小野小町

誘ふ水あらはと言ひし言の葉は根なし草ともきこえさりけり

菅原道真

もしほ草かきもならはぬ山賤の子らさへ神の御名は知りけり

紀貫之

言の葉のはなとならひて匂ひけりなけれさやけき水壅のあと

有智子内親王

嵯峨山におり出てまし、から錦今なほ色のあせすもあるかな

藤原道長

雲の上に榮えはひこる藤波は日かけをさへにさ、へけるかな

紫式部

あかそめもすはうもあれとけたかきは若紫の色にそありける

小式部内侍

は、そはの陰はなれてそ撫子のまことの色はあらはれにける

源仲國

君ならて誰れ聞きわけむ草深き嵯峨野の露のたまことのことゑ

鎌倉右大臣

は、そはのめくみの露しふか、らはこの源は涸れさらましを

菊池武時

しこくさの生ひ茂りたる筑紫路にひとともにほふ白菊のはな

里見義實

館山に君かたてつるはたかせはあはの穂波を吹きなひけけり

加藤清正

球摩川のみななみ遠きはかりことつくさて逝きし君そ悲しき

熊本城の疊の床はことくく肥後するきにて造りありしを官軍籠城の折あらはれけりと聞きて加藤清正といふ御題の出でける折に

ひめことをた、みの床も大君の御楯となりて世に知られけり

大石良雄といふことをよみて奉れるをりに

白雪の積るうらみも晴れぬらむしるし手向けしあかつきの空

賀茂真淵

みつくきのあとおもしろし縣るのふかき心はくみしらねとも

熊澤蕃山

世に廣くしけりけるかな桐原にきりひらきつる書のはやしは

吉田松陰

ますらをの残せる終の言の葉を見しおやこ、ろ思ひこそやれ

高杉晋作

かけ高き杉のひととなかりせはいかにみたれむもりの下草

熾仁親王

かすくの君か功績もそのかみの東くたりやはしめなりけむ

伊藤公爵

及には血もぬらすして軍にもまさるいさををたてしきみかな

沖禎介

真心のひかりは玉とか、やきぬ身はしへりあの露と消えても

乃木大將

たくひなき門出なりけり大君の終のみゆきにみともつかへて

熊野 謡曲

故郷のは、そをしのふ言の葉のつゆにはぬれぬ袖なかりけり

維新志士遺墨展覧會にものして

筆のあと見れはなつかしおほかたは亡き父の友なきつまの友

明治三十八年觀艦式を拜しける折夕日のいと大きに眞紅にか、やきて見えければ

にしやまの雲間に見ゆる日の丸のみはた一もと誰たてにけむ

旅

から衣たつ日かそへてまつ程も旅のたのしきひとつなりけり

旅行

津の國のなにはおきてもかなし子にさせまほしきは旅にさりける

旅宿 雨

あかつきに目はさめたれと雨の音にまた枕とる旅やかたかな
あなかりにいそかぬ旅も降る雨に籠る一日はわひしかりけり

旅宿 夢

おもしろきゆめは見つれと旅館さめてかたらむ友もなきかな

旅泊

波のおとに汐のみちひもさとるまで船路の泊日をかさねけり

汽車にて

おのつから雀おとしとなりにけり田中を走る汽車のひ、きは

汽車にて旅行しける折車のうちより見たして

あめ晴れし松のこすゑのしら雲はすくる車のけふりなりけり

富士山にのほりける時

ふしのねの雪のときはならふらむ裾野のくさは春秋もなし

真砂路に杖さしみれは底はみな雪そこりたる不二のいた、き
しら雪を消やすきものと思ひしは富士にいたらぬ心なりけり

奈良に遊ひて

くつぬきて子等もあそへりもえそめし嫩草山のわか草の上に

吉野にて

わけ入れは分け入るまゝに吉野山ふかくなり行く花のしら雲

勝手神社にて

かつてきくそのいにしへの舞の袖思ひ返すもあはれなりけり

塔尾御陵にまうて、

さくら花ちりの盛にちりひと葉なき石たゝみふむもかしこし

西行谷に行く路にて

奥深くわけ入りてこそ三吉野の山をたつねしかひもありけれ

西行庵の少しこなたに昔清水といふあり

とくくと落つる岩間の眞清水にひしりの歌も味は、れけり

観心寺に参り楠公の「わか宿の花も紅葉もなき時は光とたのむ庭の
白雪」とありしを拜して

たのみけむ雪のひかりは知らねとも君か勳そ世々を照らせる

吉野川に櫻鮎つるを見て

よしのかは花さくらあゆ釣る人は高峯の春も知らすかほなる

高野山にのほりはて、見れば寺々の庭の梅また咲かす

高野山梅のつほみのまたかたし吉野ははなもさかり過ぎしを

和歌山に至るみちほしやといふ驛にて

小車ものりあきにけるをりしもあれ翼ほしやの里に來にけり

舞子の萬龜樓にいこひて高殿より見わたしつ、

淡路島さやかになりぬこのゆふへ初秋かせや吹きわたるらむ

舞子濱にいたりければ松原の小亭に琴の音聞ゆ

をとめ子の舞子の濱の松かけに草の家見えてことのねそする

宇治川の龜石をはるかに見て

萬代もうこかぬ宇治の龜石をうきたるものとおもひけるかな

明治三十六年の春 兩陛下には西の京にみゆきましくて御すの
程はし他行をゆるされければまつ興津三保なとめくらむとて出て
たつあした

ゆるされて出てたつ今日の旅衣肩身もひろくおもほゆるかな

旅よりかへりける夜しも雨風はけしかりけるに

雨風の音もこゝろにさはらぬは家にかへりてぬる夜なりけり

胡桃の落ちたるを

思ひ出に拾ひて行かむ伊香保山ふたゝひ登りくるみならねは

明治三十六年十一月四日五日頃鹽原に紅葉見にまかりけるに散りは
て、旅館もみな冬籠りのさまいともさひしきに

残りなくもみち葉ちりて鹽原にからき旅寢をひとりするかな

高崎師の君の御別邸鶴壽山にのほりて

江の島の家居の数もよむはかり近くさやかに見ゆる今日かな

明治四十三年冬のはしめつかた大磯の長者林なる村井氏の別業に轉
地して病を養ひける頃をりにふれてよめる

村雨は汽車よりはやく過ぎ行きてぬれたる窓に日影さすなり

正述 心緒

天つたふ日かけのかつらすゑなかくかけてそいのる國の榮を

述 懐

和田中にくちて漂ふうつろ舟あれともかひはなき身なりけり
いますこし年若からはひらけたる教のにはもふまましものを
かなし子か頭にしものおくを見て母もわか身の老を知るらむ
足引の山にすむ子のまゆつくり人手からても身はをさめなむ

たらちねの母かこの世にあるほとは生かまほしきそ我願なる
たてまつるこの朝顔のときの間の盛をたにもわすれ得さりき
西に入る日かけを惜しみ鯛のなげとかひなき身となりにけり

行路述懐

よの中の道もひたりに左にとたかひによきてわたらましかは

寄馬述懐

手綱とりむちうつ人もいまはなしあはれわか身は老馬にして

寄紙述懐

かみよりも薄しときけとたやすくはみえすきかたき人心かな

他力本願のころを

里川のなかれにかけし水くるまおのれめくると思はさらなむ

七月二十日午後二時 聖上の御不例を知らする號外を拜して心もそ
らに 明治四十五年

神達もかむはかりてよ大君のおほみいたつきとくいやすへく

國民こそりて祈り奉るかひもなく日々おもらせ給ふに

小車のかなちをきしるひ、きにも心おかる、きのふ今日かな

七月三十日終に崩御ましくぬ急き内に参るに御苑にひくらしのな

くを聞きて

今よりはそのひくらしの鳴き暮し泣きや明さむあはれ此世を

御眞影を祭り奉りて

大前にひれふしなからおもふかな畏かりつる御代のくさく

九月十三日夜二重橋のほとりにて奉送をゆるさる 上后の宮大宮を
はしめまつり各宮方もこのはしのたもにかりのおまし所しつらは
せたまひて御見送りせさせ給ふ午後八時といふに御門を出てさせ給
ふなりけり

つゝの音響きわたりていてましを今と知らする時のこゝちよ
拭へとも出つる涙にいてましのさやに見えぬそいと、悲しき

きしり出つる轍のひ、き伏し拜む胸にこたへて悲しかりけり
みくるまの 高き響をひとみなの耳にのこしてきみ去りましぬ
み車のひ、きの遠くなるまゝに我も消え行くこゝちこそすれ

御大葬の夜今か出た、せ給はむといふ折かたへの杜の梢より白き
鳥の二羽たちて西南の方に行きけり

いてましにさきたつ鳥は桃山のみさ、きまてや御先つかふる

いたつきをねむしつ、十一月の末青山葬場殿を拜して

青山のあきかせ寒きみかりやにみくるまひとつ残るさひしさ

大正二年七月二十一日沼津より還啓ましくて直に青山御所に入ら
せ給ひぬ迎へ奉りて

みよろこひ聞ゆる膝にほろくとおつるはなにの事なるらむ

七月三十日青山御所よりまかて、喪章を除くとて

黒染のころもの蝶ははらへともなほさめやらぬ夢こゝちかな

五月八日天つ日かけ赤黒くして光なし夜は月いと赤く星はひとつも
見えす 大正三年

ふたはしら神さりまし、悲しさに月日のかけも色なかるらむ

五月二十四日は 昭憲皇太后御葬儀の當日なり御門の内御立關前
にて御送り申上く 同年

み車の悲しきひ、き夢ならてまた聞かむとはまた聞かむとは
みくるまのあとに心は従ひてからのみいへにかへるよはかな

みとふらひの日青山御所に参るとて

道筋の飾を見ればみともしてわれもとこよに行くこゝちしつ

七月十九日御百日祭に桃山の御須屋を拜し奉りて

久方の月とあふきしみすかたを地の下ふかくしのふかなしさ
數ならぬ身もゆるされて奥ふかきみすやの内を拜むかしこさ
限りなく出つる涙のと、まらむ時までこゝにとまりてしかな

禁苑新樹といふ題を得て先の大宮のまた後の宮にておはしましける
ほと若葉様と申上奉りけるを思ひ出て、

御苑生に茂る若葉をあふくにもかれにしみかけ先しのふかな

大宮かくれさせ給ひし後をりにふれて

召すこともあらぬ宮居に参るかなたきの帝のとねりならねと

御遺品を拜領して

かなしくもそてにうけ、り雲かくれひかりも見えぬ月の雫を
なくさめは涙なりけりかなしさをかたらむ友もあらぬ此身は

御眞影にぬかつきつ、大正四年

去年までは冬をよそなる静浦にしつけく年をむかへまし、を

御一年祭に青山御所に参りて

此花のもとにたちるてみくるまを拜みにしは昨日とおもふに

海軍少佐高崎元彦の君の戦死を聞きて

わたつみの海をはなれて山よりも高きいさを、たてし君かな

元彦君の戦死上聞に達し 后の宮より師の君へ御歌を給はりけるよ
し承りて

君ならてたれかはうけむ久方の月のしつつか、るめくみを

高崎少佐か戦死し給ひける頃梨子を恒子の君に参らすとて

うるはしき御子ありのみを唐衣つまなしとのみ世をな歎きそ

夢にたに我子見えなはと師の君のよませ給ひし御歌を拜して

なき魂はまた戦のにはにありて君か夢にも入らずやあるらむ

師の君のみやまひかろからすと傳へ聞きけれとおのれもうち臥しを
りければひとり床の上にてうめきける 明治四十四年

しきしまの言の葉山のおいまつは神もまもらむわか道のため

立春の日師の君の病いえよとおもひて

はるかさは今日たち初めつ翁くさ霜になやむも今しはしのみ

高崎恒子の君のもとに文に添へて

匂なき春風なれといたつきのうさをはらは、うれしからまし

あるあした鶯のほ、となのりそめたるか聞きすてかたくて

うくひすの今朝の初音は言の葉の^上になりとも聞えまつらむ

二月二十八日師なる高崎正風翁かくれさせ給ひしをかなしみて

天地の神もちからのおよはぬはかきれる人のいのちならむ

高崎師の君のかくれさせ給ひし後

大君のみさきつかへむ門出とも知らてひたすら惜みまつりき
此頃の世のありさまを知らすしてかくれまし、そ今は嬉しき
寫眞の前には日ことぬかつけとさ、けまつらむ言の葉そなき
御園生のあしたつ見ても世に高く響きし御聲しのはる、かな

師の君の御歌に「しきしまの道くらふ山わけむには此の一木こそし
をりなりけれ」とあるを見て

しきしまの道くらふ山かけ高きしをりありとは君そをしへし

青山なる高崎師の御靈屋にまうて、

願ふことあまたあれともとりわけてまもらせたまへ敷島の道

見真大師六百五十年に法水流久を

年経れはとしふるま、にひろこりて流れつきせぬ法の水かな

圓光大師の「月かけの至らぬ里はなけれとも」の歌をおもひて

心にもうつせはうつる月かけをみつにとのみも思ひけるかな

伊藤公の難にあひ給ひしころ

藤かつら何にはるくはるびむの秋を尋ねて散りはてにけむ

常陸丸にて戦死せられし三澤氏をいたみて

皇軍の場にひかりもはなたすて水泡と消えしたまそかなしき

をりにふれて

勝いくさいはふにもまつおもふかなうち死したる人の妻子を

靖國神社臨時大祭に

かなし子か神となりしををろかみて嬉泣するおやもありけり
空高くあかる煙火をあふきても消えにしたまの光をそおもふ

松浦伯邸にての追悼會に簾を

御靈代祀れる床のたますたれかけへたてたる世こそつらけれ

三條西季知郷三十年祭に寄道述懷を

開けゆく御代のはしめの敷島のみちのみさきは君そつかへし
刈薦のみたれし世にもいとさやにふみわけましぬ臣の行く道

東久世竹亭伯の追悼に寄竹懷舊を

うたむしろ月にしくよも此君の影のそはぬかさひしかりけり

中島歌子追悼に惜花を

見しはたゝひとめなりつる中島の花いつまでか眼に残るらむ

山田勝明君の三十日祭によみて奉れる

君もまたつかへなれにし大君のみあとしたひて天かけりけむ

林陸夫氏追悼に夕松風を

かけたかき親木は枯れて小松原ゆふへさひしき風のおとかな

植松有經翁追悼に寄硯懷舊を

文机のすゝりのふたのあけくれにしのはきはきみか水莖のあと

南郷柳子刀自のかくれ給ひしころ梢の命婦を見て

うるはしき梢の色をあふくにも枯れしやなきのかけそ戀しき

千葉胤明ぬしの太郎君の水死を悼みて

手のうちの眞玉を波にさらはれしみおやの心おもひこそやれ

山菊ひきてともに遊ひける友の身まかりける秋に

植ゑしとき君か手向に折らむとはおもひやかけし白菊のはな

二代伊藤小左衛門氏のみまかりけるを悼みて

とづくに、光をきそふしらいとも君か御靈はつなかさりけむ

金之助君みまかり給ひしのち清君よりの歌に「かくはかりありかた
かりし親そとも思はさりける昔こひしも」とありければ 明治四十四年

たらちねの恵の露は消えまし、後こそ身にはしみとほりけれ

大正二年天長節詠進 寄天祝

今年よりまたあたらしく仰くかな神代なからの天津日のかげ

天長節に望嶽といふことを

君か代を祝ふ朝に見る富士はみけしきあふくこ、ちこそすれ
雲の上の大みけしきにかしこくもよそへてあふく富士の神山

寄世祝

いにしへの書の上にも例なき御代にあふこそうれしかりけれ

寄田祝

古の千代田たから田千代を経ておましところとなりける哉

寄道祝

とづくにの人も教をこひに來て世にひろまりぬもの、ふの道

寄鏡祝

うるはしき御代の光をわたの外のかには鏡とうちあふくらむ

寄書祝

のちの世をてらす鏡となりぬへしこの大御代のことしるす書

立太子御式の日五色の雲棚引き式終る晴天鶴といふ御題を

うるはしき雲の晴れにし青空にたつしらくもは田鶴の一むら

皇子の御誕生を祝ひ奉りて

年々にすめら御國はひろこりてあれます皇子の数もそひつ、

東宮の韓國に渡らせ給ふ朝あきつむれとふを見て 明治四十年

いてましをおくるも、ちの貴人の數よりしけくとふ秋津かな

御大禮に西の京へみゆきましますを

大宮につかへまつらは間近くてこの出ましもをろかま、しを

大正御即位大禮の御當日快晴となりければ

うらくと豊榮のほる朝日影あふくかうれし今日のたる日に

御大禮のころ折にふれて

諸人の萬代うたふこゑき、て過ぎにし御代をひとりしのひつ

御大禮行はせられし後紫宸殿を拜し奉りて

麗しき旗のかすくあふきみてしのひそまつる過ぎし其日を

竹田宮と常宮殿下の御婚儀の當日内に参り親しく拜し奉りて

みそなはず大御心やいかならむならひましつる花のすかたを

恩波閣へ行啓ありしをことほきて高崎師翁へ

雲井よりさす月影にしきしまのまことの道もひかりそふらむ
みめくみの波をかつきてあまならぬ君も衣やぬらしましけむ

八月二十九日大みことのり拜して思ふことを 明治四十三年

みめくみの露をそ、かはしをれたるから撫子も色そひなまし

十月二十四日の朝 内に参らむと御堀の邊まで行きけるに折しも市
谷士官學校に行幸せさせ給ふみさきの騎兵はせ参る程なりければ拜
み奉る 明治三十七年

たはやすくおほみ車ををろかむも都のうちに住めはなりけり

兩陛下西の京に行啓まし／＼けるころ

月も日も西の都にか、やきてあつまのはるそさひしかりける

女官の繡帶作り給ふを見て

仇波のよるひるうます巻く布にまかれていえぬ傷やなからむ

大磯のさ、れを女官方に参らすとて

玉ならぬ石となむけにおとしめそ心つくしてひろひしものを

三枝の君より返しの歌を得て又

何ならぬさ、れさ、けてうれしくも君か言葉の玉を得しかな

高崎御歌所長の七十の賀に寄道祝

久方の雲井にたてししきしまの道のしをりの高くもあるかな

同じ君の七十の賀宴に侍りて

たまもの、こかねしろかねまはゆきは君か功績の光なりけり

師の君の七十になり給へるに大御盃を下されしよし承りて

大きみのおほみめくみはたまもの、御盃にも満ちあまるらむ

毛利公曾祖母君の七十七の賀に寄梅祝を

やまくちのもりの老木の梅の花高きかをりそ世にかくれなき

小出翁の七十の賀に都花を

世の人に都の花とめてられて咲くはさくらもうれしかるらむ

律僧延命寺の住職上田氏が七十の賀に

住む寺の其名にあえていにしへも稀なるよはひ君は得つらむ

百歳の翁の祝に

人みなかねかふ高根のも、の花手折りし君やうれしかるらむ

三月五日夜高崎師の君の御館にて當座に元彦君か明日の乗艦を祝ひ

て人々とよめる

乗りて行くふねを春日と聞くからに神の守もさこそと思ふ

軍用飛行氣球發明者山田氏に勳章たまはりしを祝ひて

大空を飛ひかふ船のそれよりもたかくあかりぬ君かほまれは

近藤清子君の婚儀に紅の箱のをりしきを送るとて

さ、へのさ、やかなれと紅の深きちきりはいはひこめたり

葉山にて有栖川宮御息所に始めて見え奉り種々御懇のおほせを承り
ければかしこさに

いけるかひ拾ふ今日こそうれしけれ言の葉山の濱つたひして

一月二十三日はじめて山階宮に参る 大正四年

おほけなくしつか袖にもか、りけり竹の園生のみめくみの露

小菊の權典侍より紅葉山の御畑の初なりとおしたを給はりければ

思ふ事なすといふ名も嬉しきにその初なりを得たる今日かな

はじめて高崎御歌所長を葉山の御なりとておしたを給はりければ
人々と濱邊に出ませる御ともつかふまつれりつかせ給へる杖もて砂
原に「思ふとち濱つたひしていつきのうさ忘貝拾ふ今日かな」と
遊はされけるみかへしにとはあらねと

敷島の道のしをりを尋ね来ていけるかひをもひろふ今日かな

小池道子君に文奉る序に書添へたる

敷島の道のは、そのかけならてよらむ大木もなき我が身かな

芝山順子の君のうたに感して 明治四十二年

をさな子のちからも入れぬ言の葉にうこくは人の心なりけり

上州の山莊なる近藤貴子かもとより「わき出つる岩間の清水くみあ
けて君かみもとに送りてしかな」とありけるに

言の葉のなさを汲めは岩清水むすはぬ袖もす、しかりけり

病を養ひて興津に旅ねせる友のもとへ

ときころもはる猶寒しおきつ波よるはことにもこ、ろせよ君

興風會の初會に風のいたく吹きければ得参らて

ことの葉の花の筵に出つるにも風はさはりとなりけるかな

伊勢より歸りて那須野なる田中瀧子の君のもとにいひやりける

まちかくはわか故郷のものかたり人より先にきこえむものを

御製を拜寫し奉りて

うちつけに御教うくるこ、ちして大御言の葉かしこかりけり
たくひなきこの御教の言の葉はやかても神のみこゑなりけり

高崎師の君の御詠草をうつしつ、

水莖に言葉のはなはうつせともうつらぬきみか影そこひしき

大口寄人のみもとに静之窟の歌おくとて

このころは筆捨山に蹴とりてうたはつくらすはたをこそすけ

七草會の各評いとかれくになりて毎號小舟の評のみとなりける
ころ

うるはしき花みな枯れてす、きのみ招くもうたて秋の末野に

七草會のやみにし後稻子刀自と二人にて歌よみて師の君の點こひま
つるとて

うるはしき花は枯野に色もなくのこるは稻とす、きなりけり

糸櫻に燕なみるるかた

うちむれてさくらの枝にとまれるはなれも花見の心なるらむ

盆をとりの畫に

さとひとか月にうかれてをとる夜は鳥もさわくうふすなの杜

稻穂に雀のかた

八束穂のたりほゆたけき山里はなるこのおとも聞えさりけり

立てたる俵の上に大黒の立ちたる

こ、ろさした、はその身も立ちなむと教ふる神の姿なるらむ

子供の手習の双紙に

行く年の駒の足なみはやき世にこ、ろの手綱ゆるふなよゆめ

小猫の鏡にむかひていかれるに

仇なりとすまへはすまふから猫のかけこそは世の鏡なりけれ

白扇あまたおこせて歌かけといふ人に書いてかへすとて

さやかなる扇の浦の眞砂路につけし千とりのあとそやさしき

ひとの歌に評乞はれければ少しこ、ろみて返しけるとき

ぬは玉の闇夜のつふて一つたにあたるかあらは嬉しからまし

或人より筆をおくりて此内心にかなへるに名をつけてその歌をよみ
添へてよと乞はれるに舵とりとおほせて

玉章のもしのみなとに入らむにはこの舵とりを頼むへきかな

菰野山を出つるをりに

吹く風になひく楓のわかみとり見返りかちに行くやまちな

菰野山の奥にすみやく夫婦かわかれを惜む

いかりのきはもおそれぬ山人か我にわかれを惜みてそ泣く

召されて都に出つる折母君に

恙なくおはせと言ひしひとことにこもるは千々の思なりけり

はしめて内にまゐりける時に

あしひきの山姥すかたそのまゝに雲井の庭を踏むかかしこさ

後の宮に奉るへき歌かけと大夫の短冊出し給へるに

垂孔根の母に縋れるみとり子のゑまひにたくふ花なかりけり

同じ折りに奉れる

荒波の上はかはらぬ行きかひもやすけに見ゆる人のふねかな

同じ時水草あり流に月影のうかふ晝短冊に

眞砂路に出て、遊へるあしかにもす、しき月の影やめつらむ

かしこき御あたりより召されて紀尾井町の官舎に住みつきける頃鶯
の鳴くを聞きて

春過ぎて都に出てしわか耳になほうくひすのこゑを聞くかな

同じ折芝なる假居を出つとて

今よりはわか故郷となりなまししはしとかりし芝のやとりも

父君の碑裏よみて刻り付けたる

よろつ代の後の世までも守りませ利島の里のとしのみのを

五郎をやしなひける頃をりにふれて

子を持ちて親のめくみを知ると言ふ教身にしむ昨日今日かな

養子五郎が學校の遠足すへきに空のあやしうなりにければ

かなし子か新旅すなり今日一日雨はな降りそ江の島のあたり

なやみける頃

天地のなしのま、そと任せてもかなしきことは悲しかりけり

故郷の山なる地を他にゆつりて 大正元年

しきしまの道の親にもふるさとの山にも今年わかれけるかな
たらちねの母か命にかへむには住み來し山も惜しからなくに
紅葉植ゑさくら植ゑつ、かなし子になそらへめてし故郷の山

八月母も小舟も重き病に臥しける頃かしこき御あたりより御菓子下
されけるにかひわりの鶴の形なりければ 明治四十四年

雲井よりおり來し鶴のうしれきは親子に千代を賜ふなりけり

八月末つかた住みなれし家を去るとて 同年

は、そはの枯れむとすなる夏の日に住む家されと言ふは人かも

住みわひし古家なから今はとて去らむとすれば返り見らる、

をりにふれて

枯れのこる老木のは、そひともとに心をつなくこの小舟かな

伊東彌一郎のもとに文して頼み遣す事ありける序に 大正元年

やみふせる親をなてつ、ねかふかなあた、かならむ春の便を

九月二十一日母君の入院を送りて 同年

我身たに病ますありせは彼方まで行き何くれ仕へむものを

五郎のことを思ひつ、ける頃 同年

手をやれば花はあちらに向きにけりあめにくねりし庭の撫子

十二月の一日といふに終に養子五郎を離別しぬ 同年

親となり子となりなから親としも言はぬ子故に我は泣きけり

十二月二十五日といふに職とかれけり 大正三年

大内山のほりにし日もくたる日も年こそかはれ同しかりけり

おのか歌撰歌になりぬとて御かたよりよろこひはせ給ふに

みつからもよき歌よみてうれしきに人にまてこそ喜はれけれ

後の宮のおほせことによりて香川景樹翁の日記をうつし奉りけるを
り白き綾赤き絹なと給はりければ

久方のつきのひかりに照らされてわか水莖もか、やきにけり

山階宮にて歌の御會ありし時粟のもとに鶉の群れるる刺繡したる紙
入給りけるか目もあやにうるはしかりければおしいた、きつ、

世の中をうつらと鳴きて過ぎし身も秋の光にあたる今日かな

十二月三十一日に伊藤小左衛門氏より新薬もて船の形をつくり其内
に種々をかしきもの詰めて給ひければ

あらたまのとしのうちよりうれしくも寶船こそ入り來りけれ

青島陥落せし頃南洋諸島も御手に入りきと聞きて

菊日和うちつ、きてもうれしきは北にみなみにかちときの聲

世につよき岩落し、早わさはみかたをさへにおとろかしけり

彗星の出つる頃

は、きほしいつらとあふくぬはたまの闇夜さやかに鳴く郭公

大洪水に 明治四十三年

家藏を水にひたしてたすけ船待つまのこ、ちおもひこそやれ
すくひよふ人聲かなしぬはたまの夜深くよする水のさわきに

新曲五條橋といふを杵屋兄弟の糸に聞きて

おもしろき糸にひかれてわか魂も浮れ出てけり橋のほとりに

題しらす

眞帆かたけ風の心をとる見れば波路もうさはかはらさりけり

をりにふれて

みしめなはかけて忘るな大御國ひらきたまひし神のみいさを

昭和五年四月二十日印刷
昭和五年四月二十四日發行

三重縣三重郡富洲原町
大字富田一色七百卅五番地
編輯者兼 伊藤平治郎
名古屋市東區千種町五反田五二番地
印刷者 小池清彦
名古屋市東區千種町五反田五二番地
印刷所 益三社

328
284

終

